

## リカアドウの生存費説と賃金基金説

小 玉 佐 智 子

リカアドウ (Ricardo, D.) は『経済学および課税の原理』の序において「筆者は、一般に認容されている意見を反駁するにあたって、アダム・スミスの著作のなかで、筆者がそれと意見を異にするについて理由があると思われる章句には、より詳細に論及することの必要を感じた」と述べている (On the Principles of Political Economy and Taxation, London, 1817, ed. by P. Sraffa, Cambridge, 1951, p. 6. 堀 経夫訳「経済学および課税の原理」雄松堂・六頁。—なお以下の原典および邦訳の引用はこの版本による)。周知のごとく、彼はスミス (Smith, A.) の著作を称賛し、理論上、思想上の継承者であるが、その故にこそ、またスミスの章句を批判することと一つの大きな学問的意義と必要性とを認める。そして彼のそのような批判の対象となったスミスの理論の一つに賃金論が挙げられる。リカアドウは言う、「この分配を左右する法則を決定することが、経済学における主要問題である。この学問は、テュルゴオ、ステュアート、スミス、セエ、シスモンデイ、および他の人々の著作によって、大いに進歩させられたけれども、それらは、地代、利潤、および賃銀の自然の成行きにかんしては、満足な知識をほとんど与えていない」と。そしてその理由は、彼が続いて述べるところによれば「アダム・スミス、および私が先に言及

した他の有力な著者たちは、地代の原理を正しく考察していなかったために、地代の問題が徹底的に理解されたときをまづはじめて発見しうる多くの重要な真理を見逃してきた」からである（*ibid.*・pp. 5—6・邦訳五一六頁）。そこでリカアドウは、利潤や租税の作用についてとともに、賃金についても、その自然のなり行き—すなわち富の発達が賃金におよぼす影響—に関するスミスの理論を批判し、それを通して賃金の動態的法則を樹立することを意図しているのである。そしてリカアドウのこのような意図に契機を与えたのが当時における地代理論の発展であつた。

本稿は、右の意図のもとに展開されるリカアドウの賃金論のうち、特に生存費説と基金説について、スミスのそれと対比して考察することによって、その学史的意義を明らかにしたい。すでにリカアドウの分配論や賃金論は多くの先達によって研究がなされてきているが、この問題に関しては、なお吟味の要があると思われるからである。

## 一、リカアドウの生存費説

リカアドウの賃金理論は、スミスの賃金理論と、次の諸点において共通していると見なし得る。

労働の賃金について、需要と供給の作用の結果である賃金—リカアドウはこれを「労働の市場価格」と称する。なお以下、本稿ではスミスの場合もこれを「労働の市場価格」と呼称する—と、この労働の市場価格がそれに一致せんとする傾向をもつ賃金—リカアドウはこれを「労働の自然価格」と称する。なおスミスの「賃金の自然率」・「自然的賃金」はこれとは異なる概念である<sup>(1)</sup>—とを区別すること。

後者、すなわちリカアドウのいう労働の自然価格は、労働者が自分自身生存し、かつ増減なくその種族を永續させ得るに必要な価格—生存費—であるとする事。

労働の市場価格が生存費を超過する場合には、労働者はゆたかで幸福であるが、人口—労働者数の増加にたいする刺激によって、賃金は久しからずして生存費まで下落せざるを得ない。反対に、労働の市場価格が生存費以下に

ある場合には、困苦のために人口―労働者数が減少し、その結果、賃金は久しからずして生存費まで騰貴する、となすこと。

ところでリカアドウにおける労働の市場価格と自然価格の区別、ならびに「労働の自然価格」という概念の意味するところは、トレンズ（Torrens, M.）によって影響されたものであらうと言われている<sup>(2)</sup>。リカアドウ自身も脚註でトレンズの名を挙げている（*ibid.*, p. 97. 邦訳一一三頁）。しかしリカアドウがトレンズから得たのは、主として用語とその概念であつて、右に述べた彼の賃金論のスキスの賃金論との共通点に、スキスの影響がなかったと言ひ得ないであらう。キャンナン（Canan, E.）は、「彼（リカアドウ―引用者）の賃金についての冒頭のパラグラフにおいては、彼は非常に厳密にトレンズに従っているけれども、明かに無意識に重要な修正を加えている」と指摘している<sup>(3)</sup>。そしてその修正というのは、労働の自然価格を構成する家族の養育費について、トレンズが「市場に労働の減少しない供給を保つであらうような家族を彼に養うことを得させるに必要な」と形容しているのにたいし、リカアドウは「彼らの種族を増減なく永續させるのに必要な」（*ibid.*, p. 93. 邦訳一〇九頁）としていることである。キャンナンによれば、トレンズの労働の自然価格は「通常または平均賃金以外の何ものでもないということになる」が、リカアドウのそれは「労働人口をちょうど、そしてやっと静止的に保っておくだろう賃金」である。したがってトレンズにあつては、彼自身述べているように「労働の自然価格と市場価格は長く乖離し得ない」のにたいし、リカアドウにおいては「両者は、一国の人口が増大しつつあるその長い期間の全体にわたって乖離するにちがいない」と論評している。この分析は意味深い。ただしリカアドウがトレンズの「労働の自然価格」についての定義に、僅かな、しかし重要な修正を加えているのは、キャンナンの評するように「明かに無意識に」なしたことなのであらうか。このキャンナンの指摘するトレンズとリカアドウとの間の相異点こそ、リカアドウがスキスから採用した理論的命題であるのではないだらうか、というよりも、リカアドウは、このスキスの理論的命題の上に、トレンズの用語や定義を取り入れ

て、以下にも述べるように、それを理論的に完成させたといふべきであろう。すなわち彼は、スミスの賃金論から、労働の需要供給の変化によつて乖離した労働の市場価格と自然価格―生存費―とが人口の自然的傾向を作用力として自然価格に一致せざるを得ないという理論―すなわち生存費説の部分<sup>(4)</sup>を抽出・継承し、そしてスミスの生存費概念をトレンズの定義に変え、生存費説を確立したのである。

さて、リカードウの生存費説がスミスの生存費説から画される意義は、主として以下の点にある。

第一。スミスは「生存費」を、労働者が「ふつうの人間性になつて」自分自身を扶養するとともに、その子孫を減ずることなく永続せしめるに足る最低率と理解した。そして「ふつうの人間性になう最低率」とは、彼によれば、半乞食の貧民や奴隷の半死半生のごとき生存を続けるに足る生活費を実際には意味するのであつて、生存のための社会的必要費用を含むものではなかつた。したがつてスミスにあつては、生存費は、彼自身「この国では、労働の賃金がふつうの人間性になうこの最低率によつて規定されているところはどこにもない」<sup>(5)</sup>というような非現実的性格をもつ。これにたいし、リカードウは、それを「労働者たちが、平均的にいつて、生存し、かつ彼らの種族を増減なく永続させるのに必要な食物、必需品、および慣習から彼に不可欠となつてゐる便宜品の分量」として把握した（

ibid., p. 93. 邦訳一〇九頁）。すなわち社会的必要費用を考慮してゐるのである。彼は言う、「労働の自然価格は、食物と必需品で評価してさえ、絶対的に固定かつ不変である、と理解されるべきではない。それは同じ国においても時を異にすれば変動し、また国を異にすれば実にいぢるしく異なつてゐる。それは本質的に国民の習性と慣習とに依存する。イギリスの労働者は、もしも彼の賃金がジャガイモ以外の食物を購買することができず、また泥小屋よりもよい住宅に住むことができないほどであれば、それはその自然率以下にあり、家族を維持するにはあまりにも乏しい、とみなすであらう。しかもこれらのつつましやかな自然の需要物でも人間の生活が安価であつて、彼の欲望が容易に満たされる国々では、しばしば十分であると考えられてゐる。今日、イギリスの農夫小屋で享受されてゐる

便宜品の多くは、わが国の歴史のごく初期にあつては奢侈品と思われていたであろう」と( *ibid.*, pp. 36—97. 邦訳 一一三頁)。彼のこのような「生存費」の理解の仕方は、キャナンの指摘するようにトレンズに教示されたものである。

スミスは「明かに労働者が家族を養育しうるのにちょうど必要なもの以上である」北アメリカや大ブリテンの賃金を前にして、これらの国々においては国富が不斷に増加し、賃金基金の増加が労働人口の増加に不斷に先行しているからであるとなし、生存費説に代えて賃金基金説を導入した。生存費賃金は、これら進歩国の場合、その進歩が停止したと仮定した時に、一彼によれば未だかつて到達したためしのないような程度の富裕が支配してそれ以上の前進がでなくなつた時に、そこへ下落すると予想される、いわば実現することのない最低水準なのである。スミスにあっては、賃金基金説は、キャナンの言うように「形式上は彼の生存費説を補うけれども、実際にはそれに取って代る」ものなのである。<sup>(6)</sup>これにたいし、リカアドウは生存費を右のように把えることによつて生存費説を広く静態における賃金の決定理論として一般化し得た。次節に見るごとく、リカアドウの賃金基金説は生存費説に取って代るものではなく、両者は補完的關係に立つ。今日、リカアドウが生存費説の代表者・確立者と見なされるのはこのためである。

第二。スミスは、生存費をあらゆる時代、あらゆる社会を通して固定・不変のものと理解している。そして労働者階級の未来に樂觀的で、間断なき資本の蓄積によつて、常に生存費を上廻る高賃金と人口増加の前進的狀態が半永久的に続くであろうと信じている。リカアドウにとつては、労働の自然価格＝生存費は變化する。そして社会の進歩とともに、生存費賃金は、名目的に騰貴しても、實質的に低下すると展望する。

すなわちリカアドウは労働の自然価格の騰落の原因として、第一に労働者の供給と需要、第二に労働賃金が支出される商品の価格、の二因を挙げる( *ibid.*, p. 97. 邦訳 一一四頁)。

第二の原因から先述すると、人口が増加し、社会が發展するにつれて、必要食物量は増大していくが、食物の追

加量を同一の比例的労働量をもって供給することは困難で、それを生産するのにより多くの労働が必要となる。そのため食物と必需品の価格は長期的に騰貴の傾向をもつ。必需品の価格が騰貴すれば当然貨幣賃金も上昇する。しかしそれは「それらの商品の価格の騰貴以前に彼（労働者—引用者）が購入したと同じ分量だけ、購入することができるほど十分には上昇しないであらう。」すなわち、社会の進歩とともに、物価も賃金も上昇するが、後者の上昇率は前者のそれに及ばない（*ibid.*, pp. 101—2. 邦訳一一八—一九頁）。

そしてこのように原生産物の価格の騰貴に伴って貨幣賃金が増加していくと、利潤は自然の傾向として低下せざるを得ない（*ibid.*, Chap. VI, On Profit）。したがって資本増加の傾向—労働需要の傾向—は通減する。他方、労働の供給は長期にわたって同一率で増加していく（*ibid.*, pp. 98—100. 邦訳一一四—一六頁）。

以上のごとく、リカアドウは、賃金によって購入される食料・必需品の価格騰貴と、労働需要の通減という二つの要因によって、労働の自然価格—生存費賃金は、社会の進歩とともに実質的に低下する傾向をもつと主張しているのである。リカアドウ自身が自己の生存費説、さらには賃金論について、スミスにたいする画期的意義を自認しているのは、この第二の生存費賃金の自然の傾向に関する主張である。彼は、本稿の冒頭で述べたように地代、換言すれば食料生産の困難の増大が賃金や利潤におよぼす影響に関して、スミスを批判し、正しい法則を確立することを意図しているからである。

なおリカアドウのこの法則の妥当性についてはすでに多く論じられてきているので、スミスとの対比において、以上の点を指摘するにとどめたい。

(1) 拙稿「アダム・スミスの賃金基金説」(神戸女学院大学論集十五卷一号)十頁。同「アダム・スミスの生存費説」(神戸女学院大学論集十四卷二号)三十五頁。

(2) 「原理」の冒頭で展開されるこれに関する主張は、一八一五年から一八一七年にかけて発表された意見とは異なるもので、それはその間に読んだトレンズの論文 *Essay on the External Corn Trade, 1815* に影響されるところが大きかった、とキャンナンは分析している。— E. Cannan, *A History of the Theory of Production and Distribution from 1776 to 1848*, London, 1898, pp. 191—5.

*The Works and Correspondence of David Ricardo* の編者スラファ (Sraffa, P.) もトレンズのこの書から「ひき出されたように思われる」と註を付している (p. 93. 邦訳一〇九頁)。

なお、クレアは、リアアドウの「労働の市場価格・自然価格という語はスミスから採用され、それを彼自身の意味に曲げた」と解している。(O. ST. Clair, *A Key to Ricardo*, London, 1957, pp. 104—5.)。しかし少くとも直接にはトレンズから得られたと見るべきであろう。

(3) E. Cannan, *ibid.*, pp. 194—5.

(4) リカアドウは、市場価格と自然価格を一致させる作用力をマルサスの人口原理に求めているということがしばしば言われる。すなわちこの問題については、スミスによりもマルサスに負うていると見なされるのである (例えば Diehl,

Karl, *Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardo's Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung*, Leipzig, 1905, pp. 53—54. 森耕二郎「労賃学説の史的発展」昭和二十四年・労働文化社一三〇—一八頁)。これにたいしワーマルは「人口の自然的な動きと賃金の変動とのあいだの関連についての理論は、マルサスよりもスミスの方がはるかに明瞭に發展させたところであり」、リカアドウがマルサスよりスミスに負うところの大きいことは、彼がたえず『スミス博士』を引用していることからわかるように「明白である」と主張している。—

M. T. Wernel, *The Evolution of the Classical Wage Theory*, Columbia University Press, 1939, pp. 159—160. 米田・小林訳「古典派賃金理論の發展」一九五八年・未来社二二—三頁。

(5) A. Smith, *The Wealth of Nations*, ed. by E. Cannan, p. 74. 大内兵衛・松川七郎訳「諸国民の富」第一分冊

二四〇頁）。

(9) E. Cannan, *op. cit.*, p. 186. なおこの問題については前掲拙稿に詳しい。



## 二、リカアドウの賃金基金説

リカアドウは「労働扶持の基金」(fund for the maintenance of labour) という語をしばしば使用しているが、彼にあつては、この語は、一国のその基金を指して使われている場合も、個々の資本家のその基金を指している場合も、資本のうち労働の雇用に向けられる部分すなわち賃金支払に充てられる部分の総額を意味している。彼は、この意味での「基金」の総額を一定の時点において一定したものであるとは決して考えていない。彼は、資本家によって支払われる賃金の総額が他の生産要素の価格によって、あるいはまた租税等によって変化する可能性のあることも詳述している。したがって基金説の代表的創始者はリカアドウを受けたミル (Mill, J. S.) であることと、さらに言えばミルの基金説はリカアドウの生存費説に起源を求め得るが、そして生存費説と基金説とは深い理論的關係があるが、リカアドウが「労賃基金説を支持したものであつたかのように言うこと」は妥当でないと主張すること、<sup>(1)</sup>も論拠のあるところであろう。リカアドウの著作において「労働維持のための基金」という詞に遭遇する、あるいは「賃金基金」という觀念が見出されるから、彼の賃金論には基金説が萌芽的形態において認め得るも、リカアドウは賃金基金説の主張者や代表者ではない、と見做すのが従来<sup>(2)</sup>の通説のようである。

しかしリカアドウの体系においては、労働者の賃金として分配され得る一国の生産物量は一定の時点において常に一定している。労働者階級は如何なる運動をもつてもこれを増大させることは出来ない。いわば実物的な賃金基金説といふべき思想がその根底にある。<sup>(3)</sup>リカアドウ自身は、このような基金説については、生存費説の場合と異つて積極的に樹立する意図をもつておらず、一つの理論としてまとまつた形で明白に主張していない。ただ以下にも引用するようないくつかの箇所の叙述を通して、彼の分配理論に潜在していることが認められるにすぎない。しかしそれにもかかわらず、このリカアドウの分配論が賃金基金説の形成にもつた意味は、単なる萌芽形態としてのそれ以上の、

もっと深大なものがあつたのではないであらうか、と考えられるのである。以下において、右の点を明らかにしたい。

まずリカアドウは第二十一章の冒頭で次のように述べている、「―仮に、労働維持のための基金が二倍され、三倍され、あるいは四倍されとしても、それらの基金によつて雇用さるべき働き手の必要な人数を確保するにあつてのいかなる困難も、まもなく無くなるであらう、しかし、その国の食物を絶えず追加することがますます困難になつてくるために、同一価値の基金はおそらく同一量の労働を維持しないであらう。もしも労働者の必需品がつねに同じ容易さをもつて増加しうるならば、たとえどんな額まで資本が蓄積されようとも、利潤率または賃金率にはなんらの永続的変更も起こりえないであらう」と（*ibid.*, p. 289. 邦訳三三三頁）。この主張は、第九章における賃金と穀物の高価の關係についての叙述―「資本の蓄積は当然に労働雇用者間の競争の増加をもたらし、その結果として労働の価格の騰貴をもたらし。増加した賃金はかならずしも常にただちに食物に支出されるのではなくて、最初は労働者の他の享樂品に向けられる。しかしながら、労働者の境遇の改善は、彼に結婚する氣を起こさせ、かつそれを可能にする、次いで、彼の家族の維持のための食物にたいする需要が、彼の賃金が一時的に支出されていた他の享樂品にたいする需要に、当然取つて代る。そこで穀物は騰貴する、…このことが起こつた後に、穀物がふたたびその以前の価格にまで下落するか、それともひきつづいて永続的により高いかは、穀物の増加量を供給する土地の質に依存するであらう。もしもそれが最後に耕作された土地と同一の肥沃度の土地から、より大なる労働費用を用いないで、取得されるとすれば、価格はその以前の狀態まで下落するであらう。もしもより瘦せた土地からであるとすれば、価格はひきつづいて永続的により高いであらう。…もしも穀物がその以前の価格にまで下落しているならば、賃金はふたたびその以前の価格にまで低下するであらう、もしも穀物の供給の増加分がより劣質の土地から生産されるとすれば、賃金は低下するであらうがその以前の価格よりも高いところにとどまるであらう」（*ibid.*, p. 163. 邦訳一八

九—一九〇頁）—に照らすならば、以下のように解されよう。

資本の蓄積が行われ、一国の労働扶持の基金がある時点で仮に二倍になると、

一、雇用人の間に競争が増し、労働者一人当りの貨幣賃金（労働扶持の基金を労働人口で除した商と考えられる）は二倍に騰貴する

二、この労働者の状態の改善は彼らの間に結婚を誘い、そしてその家族を養うための食物需要は二倍に増加する

三、食物価格が二倍に騰貴する

四、耕作の拡張もしくは既耕地への投下資本の増大によって食料の増産を行う

もしも二倍の穀物が労働費用を増すことなしに得られるならば、すなわち最後に耕されたと同じ豊度の良地が二倍の食物生産のために必要な程度以上に存在するか、または既耕地に二倍の資本を投下しても収穫が比例的に増すならば、

五、穀物価格は旧水準にまで低落する

六、したがって、この時点では労働者は二倍量の食料を購入し得るようになる。すなわち実質賃金が二倍になる

七、やがて子供が成長して、労働の供給も二倍になる

八、この段階にいたると、すなわち長期においては、貨幣賃金も実質賃金も再び旧水準にまで下落するはずである。

しかし現実には、社会と富との進歩につれて、所要の食物附加量をば、労働費用を増すことなしに得ることは不可能になっていく。より劣等な土地を耕作することにより、より高い費用でそれを得なければならないのである。この場合には、

五、食料価格は永く旧価格よりも高い水準に留まる

六、したがって労働者は二倍になった貨幣賃金でもって二倍量の食料を購入し得ない。すなわち実質賃金は二倍

にまで上昇し得ず、食料増産の相対的容易さに比例した程度の騰貴をする。

七、子供が成長して労働力として供給される段階に達すると、労働人口は実質賃金の上昇率もしくは食料生産の増加率に見合った割合だけ増加する

八、この段階にいたると、すなわち長期においては、貨幣賃金は再び下落するが、旧水準よりも高いところに落ち着く。実質賃金は旧水準に復する。

いったん資本が蓄積され、労働扶持の基金が増大すると、人口・食料生産・賃金の上に、以上のような変化の過程が惹き起されていくのである。

ここに見られるように、最初の時点で労働扶持の基金が二倍になったとしても、耕作の拡張によって増加した食料が市場に出廻る時点までは、労働者の実質賃金は従前と同じ高さにある。一人の労働者が騰貴した貨幣賃金でもって購入し得るのは、依然として、すでに耕作されていた土地から生産された一定量の労働者用の食料を、労働人口で除した商に相当する量の食料である。ただ食料の価格に変化が生じたにすぎない。しかもリカアドウは蓄積が「労働にたいする需要の増加、賃金の上昇、人口の増加、原生産物にたいする需要の促進、および耕作の拡張へと導くであろう」( *ibid.*, pp. 79-80. 邦訳九三頁) が、それまでには「かなりの期間が経過してゐる」( *ibid.*, p. 80, p. 165. 邦訳九三頁、一九二頁) と述べているのであって、すなわちかなりの長年月の間、労働者がその貨幣賃金をもつて購入し得る食料の高は固定していると解して差し支えないであろう。要するに、貨幣的な一国の賃金基金は増加させることができるけれども、それはかなりの年月の間は単に食料の価格を騰貴させるにすぎず、労働者の生活水準は、その間、一定量の食料という実物的な賃金基金と人口とによって決定づけられるのである。

もつともリカアドウにあつては、食料の生産高は、資本と賃金基金の増減によって、時間の遅れはあるが、変化する。そして未耕地の耕作や既耕地にたいする資本の追加投資を通して増産された食料が市場に出廻ってきた時点で、

実質賃金は確かに騰貴する。しかし右に見るごとく、現実には、食料の生産高は劣等地の耕作や既耕地における収獲通減の法則の作用のために労働扶持の基金の増大に比例しては増加しない。観念的には、基金が増大しても、それ以上食料の増産が不可能な限界状態を想定することも可能である。それはともかくとして、資本家も労働者も自由に地理的・自然的条件を支配することはできない。食料生産の難易が実質賃金の上昇率を左右する。自由に増産し得ない食料生産高が賃金の水準を決定する。

そしてやがて実質賃金の上昇の程度に應じて人口が上昇してくると、すなわち長期においては、実質賃金は旧水準に復するが、その賃金は前節で見たごとく、生存費に一致する。そこでは、人口は一国の食料総生産額という実物的な賃金基金を生存費で除した商であり、また一人当りの平均賃金はこの実物的な賃金基金を人口で除した商にほかないのである。

次に、リカアドウにおいては、資本の蓄積は、資本家が利潤として得た貨幣の一部または全部を節約することによって生産に投下する活動であるにとどまらず、それに相当する額の労働者の食料や必需品を支配する活動を伴わねばならないようである。例えば彼は次のように述べる、――「仮に年収一〇万の人に一万ポンドが与えられるとすれば、もし彼がその一万ポンドを生産的に使用すれば、彼の有効需要は、新しい労働者を仕事につかせるような食物、衣服、および原材料に向けられるであろう」(ibid., p. 291. 邦訳三三五頁)と。またリカアドウは資本を流動資本と固定資本とに分類し、流動資本は「労働維持のために使用され」としている(ibid., p. 32. 邦訳三六頁)が、それは貨幣賃金として労働者に支払われるということと、労働者の食料や必需品に投じられるということの両方の意味をもっている。そのことは第三十一章で彼が仮定している一人の資本家の資本使用の例において明白に現われている。この資本家は二万ポンドの資本を農業と必需品製造業に投じ、二万ポンドのうち七〇〇〇ポンドを固定資本、一万三〇〇〇ポンドを流動資本として使用するが、彼によると「毎年この資本家は、一万三〇〇〇ポンドの価値をもつ食物および必需品を所有する

ことによって、彼の作業を開始し、その全部を、彼はその一年の間にその額の貨幣にたいして彼自身の労働者に販売する、そして同一期間中に、彼は彼らに同額の貨幣を賃金として支払う」のである（*ibid.*, pp. 388—9. 邦訳四四七頁）。そしてこれは農業者や必需品製造業者に限ることではなく、他の業者、例えば服地製造業者の場合も同様で、「彼ら（農業者および必需品製造業者—引用者）は穀物および必需品を服地とひきかえに服地製造業者に与えた、そして服地製造業者は、彼の労働者が彼に与えた服地とひきかえにそれらの物（穀物および必需品）を彼らに授けたのである」と述べている（*ibid.*, p. 391. 邦訳四四九頁—傍点は引用者）。すなわち服地製造業者は生産した服地と交換に得た穀物および必需品を流動資本として作業を開始するというのである。第十九章における「流動資本が投下されているなんらかの用途からそれをひき揚げることは、固定資本ほどには困難でない。…ある業務における労働者の衣服、食物、および住居は、他の業務における労働者の維持に向けられる」という主張（*ibid.*, p. 266. 邦訳二〇七頁）も、彼が流動資本を実物的に抱えていることをよく示すものであろう。他方、固定資本の方は、労働者によって、—機械を使用しないで彼らの労働だけでもって生産される、—トリカアドウは仮定している。例えば彼は第一章の価値論において「二人の人がおのおの一〇〇人を一年間二台の機械の建造に雇用し、…これらの機械の一方を所有する人は、翌年は、一〇〇人の援助を得て、服地の製造にこれを使用し、他方の機械を所有する人もまた、同様に一〇〇人の援助を得て、綿製品の製造にこれを使用する…」と仮定している（*ibid.*, 33 邦訳三七頁）し、第三十一章の機械論でも先に引用したところに続いて「その年度末に、労働者は一万五〇〇〇ポンドの価値をもつ食物および必需品を彼（資本金—引用者）の所有に戻すが、…これらの生産物にかなうかぎり、その年の総生産物は一万五〇〇〇ポンドであり、そして純生産物は二〇〇〇ポンドである。いま次年度に、この資本金は彼の労働者の半数を機械の建造のために雇用し、そして他の半数を相変らず食物および必需品の生産のために雇用すると仮定しよう。…機械は七五〇〇ポンドの値打をもち、食物および必需品は七五〇〇ポンドの値打をもつであろう、それゆ

えに、この資本家の資本は以前と同じ大きさであろう」と仮定的に述べている（*ibid.*, p. 389. 邦訳四四七頁）。

つまり機械は、それを生産した労働者によって消費された食料と必需品に分解するのである。流動資本（食料・必需品）は労働力を媒介として固定資本（機械）に転化し、その固定資本は流動資本と結合して消費財に転化する、すなわち

流動資本 ——— 固定資本  
=

✓ 消費財。

これは、

スミスの再生産および資本蓄積論における叙述を図式化した

場合と同じである。

マルクスの言うように、

リカアドウはこの図式をスミスから継承したと思われる。もともとリカ

アドウは説明の便宜上、

機械を生産するにも固定資本が必要であることを無視したのかも知れない。しかし彼はたと

いその点を認識していたとしても、無視することに抵抗を感じなかったが故に、新たに蓄積された資本は労働者の食

料と必需品に向うと述べ、その資本の一部が直接機械や道具に投じられることを看過したのである。

流動資本と固定資本、ならびに資本の循環・蓄積を右のように把握した場合、ある社会の一定時における労働者に

たいする需要が食料と必需品の現在高によって表現されるのは当然であろう。機械論における彼の主張のごとく、一

万三千磅の食料と必需品をもって、労働者の全部を食料・必需品の生産に従事させるか、あるいはその内の半数の労働者を機械の生産に従事させるかによって資本家の労働雇用力は異ってくるが、それは翌年以降のことである。い

かなる一定時点においても、食料・必需品の実物的な賃金総額は与えられたものである。リカアドウの賃金基金説は彼

のかかる資本観に裏付けられている、と考える。

ところで以上のような意味での実物的な基金説は、厳密に言えば、孤立国で、土地収獲通減の法則が作用し、労働

者がその賃金の全額を食料

土地生産物の購入に充てる、ということを前提としなければ成り立たない。資本の蓄積

によって貨幣賃金が増した場合、もしその上昇分が労働者によって、生産増大の容易な製造品に支出されるならば、

その上昇率に見合った実質賃金の上昇・生活水準の向上が期待されよう。そして言うまでもなく労働者が賃金でも

って購入するのは食料ばかりではない。しかも食料にたいする需要の弾力性は小さく、賃金の上昇分については、む

しる製造品に支出する割合が相対的により大きくなるのがふつうである。リカアドウ自身も「増加した賃金はかならずしもつねにただちに食物に支出されるのではなくて、最初は労働者の他の享樂品に向けられる」と述べている（*ibid.*, p. 163. 邦訳一八九頁）。また「彼（労働者—引用者）は十中八九は、その増加賃金の一部分を用いて、自分自身に豊富に食物および必需品を備えるであろう、——しかもその残余を用いて、彼は、自分に好ましいならば、彼の享樂に役立ちうるようななんらかの商品を——椅子、テーブル、および金物類を、もしくはより上等な衣服、砂糖、およびタバコを、購買するかもしれない」とも言う（*ibid.*, p. 406. 邦訳四六七頁）。それにもかかわらず彼が以上のごとき基金説を主張しているのは「家庭的団欒の喜びはきわめて大である」（*ibid.*, p. 407. 邦訳四六七頁）ために、實際上においては「彼の家族の維持のための食物にたいする需要が、彼の賃金が一時的に支出されていた他の享樂品にたいする需要に、当然取って代わる」（*ibid.*, p. 163. 邦訳一八九頁）というように、労働者が享樂財を消費するのは全く一時的な例外事としてしかあり得ないと考えているからである。それと同時に、リカアドウは食物以外の必需品については、以下、明らかにするように、その殆んどが土地の生産物であると考えているからである。要するに彼は、労働者の消費財の大部分が直接間接土地の生産物であつて生産の増加に困難を伴うと考えているのである。

すなわちリカアドウにおいては、富者の消費財と労働者の消費財とが厳密に区別される<sup>(6)</sup>。例えば七章で「もっぱら金持によつて消費される諸商品：ブドウ酒、ビロード、絹織物、およびその他の高価な商品」と富者の消費財を挙げ（*ibid.*, p. 132 邦訳一五五頁）、そして六章では「絹製品やビロードは労働者によつて消費されず」とか、「労働者の必要としない絹製品、ビロード、家具、および他の商品」という表現で（*ibid.*, p. 118. 邦訳一三九頁）、それを労働者の消費財から区別している。他方、労働者の消費財については、穀物のほかに「すべての種類の労働者が、石鹼、服地、靴、ろうそく、および他の各種の商品を消費する、ということは議論の余地がないであろう」と言



（*ibid.*, p. 224. 邦訳二五九—六〇頁）、他の箇所ではこれらに加えて茶、砂糖、薪炭、塩などを具体的に挙げている（*ibid.*, p. 104, p. 306. 邦訳一二—二頁、三五—三六頁）。そして労働者がその賃金を穀物と他のこれらの必需品との間に配分する割合は、例証に必要な場合五〇パーセントずつと仮定している（*ibid.*, p. 103. 邦訳一二〇—一二一頁）ので、大体その程度であったと見て差し支えないであろう。しかし後者の穀物以外の必需品についても、原料は多くは土地の生産物であって、穀物と同様に、生産の増加に困難を伴い、資本の蓄積にともなって価格は上昇すると考えている。すなわち利潤論においては次のように述べているのである、——「原生産物の騰貴によって、その価格に多少とも影響を受けない商品は、ほとんどない。なぜならば、土地から得られる原材料のいくらかが大抵の商品の構成に加わるからである。綿製品、リネン、および服地は、すべて、小麦の騰貴とともに、価格が騰貴するであろう。しかしこれらの商品が騰貴するのは、それをつくる原材料により大なる労働が支出されたためであって、製造業者がこれらの商品（の製造）に雇用した労働者により多くを支払ったからではない」（*ibid.*, pp. 117—8. 邦訳一三八頁）。また賃金論でも「他の（穀物以外の——引用者）諸商品の価格は、原生産物がその構成に参加するに比例してひき上げられるであろうから、彼はこれらのなかの若干のものにたいして、より多くを支払わなければならないであろう。……彼は、ベーコン、チーズ、バター、リネン、短靴、および服地にたいして、より多くを支払うであろう。それゆえに、前記のような貨幣賃金をもってしても、彼の境遇は比較的により悪くなるであろう」という主張が見られる（*ibid.*, p. 104. 邦訳一二—二頁）。彼はこのパラグラフの中で、原生産物に関係のない支出品目として、茶、砂糖、石鹼、ろうそく、および家賃を挙げている。しかしリカアドウは、理論を構成する場合には、そのような直接間接の土地の生産物以外の労働者の消費財を無視してしまう傾向がある。彼はしばしば消費財として土地の直接の生産物だけを取り扱いさえする。さらに言えば、リカアドウの中には、労働者の消費財、すなわち穀物という認識が潜在する。而して、リカアドウが上述のような実物的な賃金基金説を形成するにいたったのは、

一つにはこのような労働者の消費財についての把え方によるところが大きいと言ひ得よう。

以上、リカアドウの賃金基金説の本質、ならびにそれを裏づけるところの彼の資本と労働者用消費財についての見解を明かにした。

ところで、すでにスミスは「賃金を支払うために予定された基金」という言葉を用いていた。そして彼の進歩国と衰退国の賃金水準決定に関する叙述には、ある一定の時期においては賃金を支払うために予定された基金と雇用を求める人口は一定であり、賃金は前者を後者で除した商であるとする見解——賃金基金説——が認められる。スミスは資本として蓄積された富はすべて賃金基金を形成すると見なしているし、流動資本として労働者の実物的な生活資料も挙げている。リカアドウはスミスからこれらの点を継承したと見なして差し支えないであろう。しかしスミスの賃金基金は貨幣的であり、そして彼は賃金基金の増大はそれに見合った労働者の生活資料の増大を伴うと信じていた。賃金基金が増加すると、それによる人口の増殖が実現するまでは、労働者の賃金が、貨幣的にばかりでなく、実質的にも上昇することを彼は疑わない。これにたいし、リカアドウの賃金基金は、資本家も労働者も自由に増減することのできない食物の一定量である。この基金説におけるリカアドウのスミスにたいする基本的差異は、両者の時代的背景の違いにもよるが、マルサス（Malthus, Th. R.）の影響によるものであると考<sup>(7)</sup>える。そして、賃金基金説の正否は別として、リカアドウは「賃金基金」をこのようにスミスと異なる内容において把握することによって基金説を發展させたのである。

(1) 森耕次郎「前掲書」一六八頁。教授はこれについて二つの理由を挙げられる。第一は固有の労賃基金説は「ある一定の社会において、ある一定の時期において労働者に労賃として支払われる一定の固定基金があることを主張する」のにないし、リカードウの場合は「かかる労賃の支払に充てられるべき一定の労働基金の存在を言わない」で、「ただ漫然と労働者の維持に充てらるるところの可動的なる資本部分があることを言ったにすぎない」こと。第二は、リカードウが「労賃基金の増減は直ちに労賃の変動を惹起す」と言う場合、その労賃は「労働の市場価格であって、その自然価格でない」と推すべきであって、その影響は「一時的偶発的なものであって、恒久的本源的なわけではない」こと、である。

(2) 上林貞次郎「賃金理論」一九五二年・創元社二六五頁。

(3) クレアはリカードウを実物的な意味での基金説の主張者と理解している。彼の主たる論拠とするところは、リカードウが労働需要を資本家の提供する穀物として把握していること、穀物は一年に一度しか収穫し得ないこと、したがってその年の間、倉庫にある食料は一定で、ストライキ等をもつても増大させることはできない、というにある、——

O. S. T. Clair, op. cit., Chap. 7, Ricardo and the Wages Fund.

(4) A. Smith, op. cit., Book, II, Chap. I, III.

(5) K. Marx, Das Kapital, Volksausg. bsgt. V. Marx-Engels-Lenin-Institut, I. Bd., S. 618 — 9. 長谷部訳、青木文庫版第四分冊九一七—八頁）。

(6) O. S. T. Clair, op. cit., pp. 94 — 5.

(7) トインビーは、マルサスの眼前にあった時代——不作続き——は例外的で、マルサスの理論は一七九五年から一八一五年までの二十年間についてだけ正しかったが、「一たび賃金は人口と食物の間に依存すると言われるや、資本を食物におきかえ、食物と資本を誤って同一視し、賃金は人口と資本との割合に依存すると言うことは容易であった。それからその同一視が忘れられたとき、一定の時期においては、雇主も労働者も増減することのできない賃金支払に定められている賃金資本——食物、靴、家具、衣服等——の一定量が存在すると考えられ、かくて賃金率は、両者の意志とは関係なく、自然の法則により規制されると考えられるようになった」と述べている。これは彼が、マルサスやミルの賃金基金説につ

いて論評しているのであるが、リカアードウについても例外ではないであろう。—— A. T. Toynbee, *Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England*, London, 1884, (sixth ed.) pp. 98—9. 塚谷・永田訳「英国産業革命史」一四〇—一頁。

Kodama, Sachiko

## Résumé

### On Ricardo's Subsistence Theory and Wage-Fund Doctrine

In this paper, I discussed Ricardo's subsistence theory and wage-fund doctrine in contrast with Adam Smith's.

Ricardo seems to have adopted the subsistence theory from Smith's wage theory. Adam Smith did not apply his subsistence theory to the thriving and advancing countries, because he did not suppose a certain level of conventional necessities as necessities entering into the subsistence level, and he thought that the subsistence wage was the same as what worker received under slavery or serfdom. Adam Smith's subsistence theory could not explain the differences of static wages between different countries and between different periods. But Ricardo did not make this mistake. According to Ricardo, natural wage (i. e. subsistence wage) are what has become indispensable to the labourer from habits and customs. Ricardo's subsistence theory, therefore, seems able to apply to the static wages in all countries and all times.

In the view of Adam Smith, the subsistence-for-a family rate and subsistence wage are absolutely fixed and constant. Here Ricardo contends that in the natural advance of society, the money wages must rise, but the real subsistence-wages have a tendency to fall, owing to the "diminishing returns" obtainable on the marginal land.

Ricardo appears to regard capital as being nothing more than a fund for the maintenance of labour.

He appears also to assume that the fund for the maintenance of labour consists mainly of the food held by the capitalists. The amount of food

is reasoned upon as a predetermined amount at any given moment. It was supposed that at any given moment there is a fixed quantity of food destined for the payment of wages, which neither employers nor labourers can diminish or increase, and thus the rate of wages depends solely on the number of labourers.